

国宝 姫路城

ガイドブック



喜斎門（きさいもん）から望む姫路城

改定版 2000 年 12 月 1 日

姫路鷹城ライオンズクラブ

目 次

概説	各部		姫路城あれこれ
1. 姫路城の歴史	菱の門	塩櫓	白鷺城
2. 姫路城の特徴	三国堀	水一門	天守の畳
	西の丸	備前丸	秀吉が築いた城
	化粧櫓	切腹丸	不戦の城
	にの門	帯の櫓	不燃の城
	はの門	太鼓櫓	姫路藩の侍数
	ほの門	りの門	昭和の築城
	油壁	お菊井戸	大手門の話
	姥ヶ石の伝説	ぬの門	門の話
関連年表	腰の曲輪	姫路城の石垣	姫路城の鬼門除け
ガイドコース略図		るの門 21	

姫路城用語辞典

はじめに

1. この冊子は、国宝「姫路城」のガイド用に作成したものです。
2. 参考までに、略図をつけ、見出しの後尾に付した番号と照合してあります。

おねがい

世界に誇る国宝です。落書きなどいたづらをなさいませぬように。また、城内は火気厳禁です。禁酒、禁煙、食事もできませんので注意くださるようお願いします。



（姫路城ガイド教本 昭和 57 年 9 月改定 姫路観光協会 作成）
平成 12 年 12 月 姫路鷺城ライオンズクラブ 改定

概説

1. 姫路城の歴史

姫路城は今から約 670 年前、元弘 3 年（1333）播磨の守護職、赤松円心（則村）が護良（もりなが）親王の北条討伐の令に応じて兵をあげ、ここ姫山にとりでを築き、その子貞範（さだのり）が館を設けたのがその始まりと言われていました。

しかし、最近の研究では、黒田官兵衛孝高（よしたか）の祖父と父、重隆（しげたか）と職隆（もとたか）が主君、小寺政職（まさもと）の許しを得て天文 24 年（1555）から永禄 4 年（1561）の間に御着城の出城として築いたという説が有力です。

そして天正 8 年（1580）約 420 年前、羽柴秀吉が黒田官兵衛孝高（よしたか）のすすめに従い、中国攻めの根拠地として 3 層の天守閣を築きました。

その後慶長 6 年（1601）約 400 年まえ、徳川家康の娘ムコで、世に「西国の将軍」といわれた池田三左衛門輝政が、その豊かな財力と徳川幕府を背景に、当時としては、まさに第 1 級ともいえる大城郭を築きました。

更に池田氏のあと入部した本多忠政（ただまさ）が、その子忠刻（ただとき）の奥方に千姫を迎え、「化粧櫓」（けしょうやぐら）や「西の丸」一帯を築き、ここに見られる姫路城が完成したのです。

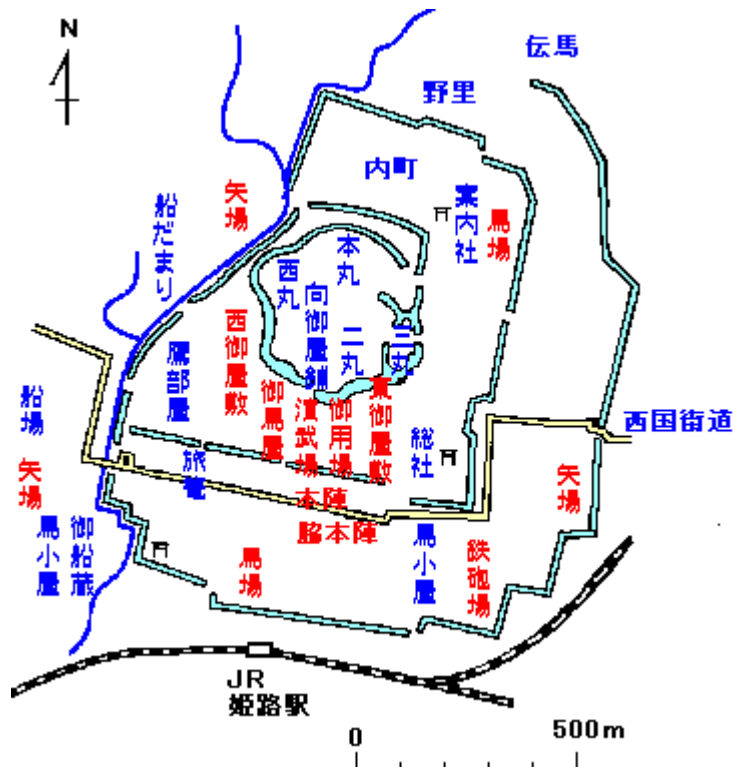
歴代城主

赤松 則村	元弘 3 年	1,333
赤松 貞範	正平元年	1,346
小寺 頼季（目代）	正平 4 年	1,349
山名 持豊	嘉吉元年	1,441
赤松 政則	応仁元年	1,467
小寺 豊職（目代）	文明元年	1,469
黒田 重隆	天文 14 年	1,545
黒田 孝高	永禄 10 年	1,567
羽柴 秀吉	天正 8 年	1,580
木下 家定	天正 13 年	1,585
池田 輝政	慶長 5 年	1,600
本多 忠政	元和 3 年	1,617
松平 忠明	寛永 16 年	1,639
松平 直基	慶安元年	1,648
榊原 忠次	慶安 2 年	1,649
松平 直矩	寛文 7 年	1,667
本多 忠国	天和 2 年	1,682
榊原 政邦	宝永元年	1,704
松平 明矩	寛保元年	1,741
酒井 忠恭	寛延 2 年	1,749



姫路城の大きさ

城は東西 950 ～ 1600m、南北 900 ～ 1700m、周囲 4200 m (1 里 23 町) 面積 230ha (70 万 7 千坪) で、甲子園球場の 60 倍ほどの広さを持っています。南の中濠は今の国道(2号線)東行一方通行、外濠はＪＲ姫路駅の近くにありました。



築城の背景

徳川家康は、関ヶ原の合戦に勝って天下制覇が目前になりましたが、なお大阪城の豊臣秀頼が西国の諸大名と手を握る危険がありました。姫路の地はこれを遮断し、また大阪城の背後をつく絶好の位置にありました。

そこで家康は、娘、督姫(とくひめ)の夫で信頼のおける池田輝政をこの地におき、備前、淡路合わせて一家で 87 万石、実際は 97 万 8 千石を与え、大阪城に匹敵するこの城を築かせたのです。

それから本多、松平、榊原、酒井と赤松貞範(さだのり)以来 13 氏 48 人が約 530 年間在城しました。



(故 成井 次郎 画)

城主の更迭（こうてつ）

徳川幕府にとって姫路は、西国諸大名をおさえる重要な地点だったので、代々譜代の大名を配置しました。それだけでなく当主が幼かったり病弱なときは移しかえましたから、めまぐるしく城主の入れかえがありました。

明治になってこの城も壊される運命にありましたが、陸軍省第4局代理、中村重遠（しげとう）大佐の意見によって保存されることになりました。そして太平洋戦争においても幸い爆撃をまぬがれ今日に至っています。

競売になった姫路城

明治維新になり、明治4年（1871年）に廃藩置県が行われました。城の保存にはたくさんのお金が必要なことから、全国各地のお城が解体されたり、売りに出されました。姫路城も例外ではなく、売りに出され23円50銭で市内の金物商、神戸（かんべ）清一郎氏が落札しました。しかし、取り除きに膨大な費用がかかるため、権利を捨ててしまったということですが、詳しいことはもうわかりません。（傷んだお城 - 明治初期）



中村大佐の顕彰碑

明治7年、歩兵10連隊の設置で、櫓や門などが取り壊され、天守なども壊されようとしたが、名古屋城とともに天下の代表的名城として、中村大佐が陸軍卿の山県有朋（やまがたありとも）を動かして陸軍省の力で保存されることになりました。顕彰碑が「菱の門」内側に立っています。

西南の役で熊本城を、そして太平洋戦争で名古屋城が戦争を受け昔ながらの面影を留めていない今日、姫路城は名実ともに日本で偉大な文化遺産として私達全国民が世界に誇ることが出来る名城です。



国宝4城

姫路城（兵庫県）

松本城（長野県）

彦根城（滋賀県）

犬山城（愛知県）



2 . 姫路城の特徴

姫路城が二つとない名城といわれるのは、

- (1) まず城の良し悪しは「縄張」(なわばり)とよばれる設計、構成、仕組みによって決まるといわれます。姫路城は姫山という丘を利用した平山城ですが、姫路城の縄張は螺旋(らせん)式縄張といわれ、何重もの抵抗線となる複雑巧妙なものであることです。
- (2) 天守閣が、大天守と三つの小天守をむすんだ連立式です。
- (3) 加えて、千鳥破風(ちどりはふう)、唐破風(からはふう)が巧みに組合わされ、木地を外に出さないいわゆる白漆喰総塗籠(しろしっくいそうぬりこめ)です。
- (4) 全体の構造がよく整って均斉がとれ、形が秀でて美しいことです。
- (5) また、天守をはじめ、櫓、門など 82 余りに及ぶ建造物を中心に、昔の姿がよく残されて、わが国の城郭の制度を知ることができることなどによります。

指定文化財

国宝 8 大天守、東、乾、西の各小天守、イ、ロ、ハ、ニの渡り櫓

重要文化財 「菱の門」「化粧櫓」堀など国宝以外のすべての建造物

特別史跡 中濠以内



(連立する天守)

3 . 世界文化遺産

1972年の第17回ユネスコ総会で採択された「世界遺産条約」(世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約)は、文化財や自然は、たとえそれが遠くにあるとも、その国や民族だけのものではなく、私たち一人ひとりのかけがえのない宝なのだから、それらの保護は人類の課題であるという考えのもとに結ばれた条約です。



この条約に定められる「世界遺産」として世界遺産委員会の厳しい審査の後、1973年(平成5年)12月に姫路城が、リストに加えられ、世界的な遺産として認められることができました。

なお、世界遺産には以下のようなものが指定されています。

ピラミッド(エジプト) 万里の長城(中国) ベルサイユ宮殿(フランス)
ガラパゴス諸島(エクアドル) グランドキャニオン(アメリカ) 等

日本の世界遺産リスト

法隆寺地域の仏教建造物	奈良県	1993/12/11	文化遺産
姫路城	兵庫県	1993/12/11	文化遺産
屋久島	鹿児島県	1993/12/11	自然遺産
白神山地	秋田県・青森県	1993/12/11	自然遺産
古都京都の文化財(京都市、宇治市、大津市)	京都府・滋賀県	1994/12/17	文化遺産
白川郷・五箇山の合掌造り集落	岐阜県・富山県	1995/12/09	文化遺産
原爆ドーム	広島県	1996/12/07	文化遺産
厳島神社	広島県	1996/12/07	文化遺産
古都奈良の文化財	奈良県	1998/12/05	文化遺産
日光の社寺	栃木県	1999/12/04	文化遺産

各部

「菱の門」

この門を「菱（ひし）の門」と呼びます。軒下に大きな菱の紋が取り付けられているところからその名が出たといわれます。

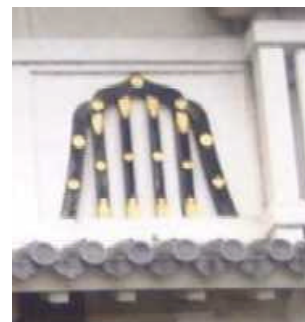
この門は、城内で最も大きく構えもりっぱで、一説には伏見城から移されたともいわれ、桃山時代の建築らしい華やかな美しい城門です。

階上の窓は「火灯窓」（かとうまど）といいまして、金閣寺や銀閣寺などお寺の用いられておりますが、この城にも取り入れられ、西と乾（いぬい）の小天守にもつけられています。



マス型

門の前の石垣と土堀は俗に櫓（ます）型と呼ばれ、鍵型になっていて、押し寄せる敵兵のホコ先をさえぎるとともに、外から内部を見すかされないようにする役目を持っています。



菱の門 と 「火灯窓」（かとうまど）

姫路城の門

姫路城にはその昔、いろは順に名づけられた門が 15、その他の門が 69、あわせて 84 門ありましたが、今は、いろは付きが 13、その他の門が 8、合計 21 門残っています。

水の門

「ほ」の以内、天守に近づく「水」がつけられています。

門のいろいろ

棟門（むねもん）... 「ち」の門「水一」「水二」門
高麗門（こうらいもん）... 「い」「ろ」「へ」「と二」
「と四」「り」門うち「へ」門は
潜戸付、他 5 門は脇門付
櫓門（やぐらもん）... 「菱の門」「は」「と一」「ぬ」
門うち「ぬ」門二重櫓
埋門（うずめもん）... 「ほ」「水三」「水四」紋
穴門（あなもん）... 「る」の門



（写真は「ほ」門と油壁）

三国堀



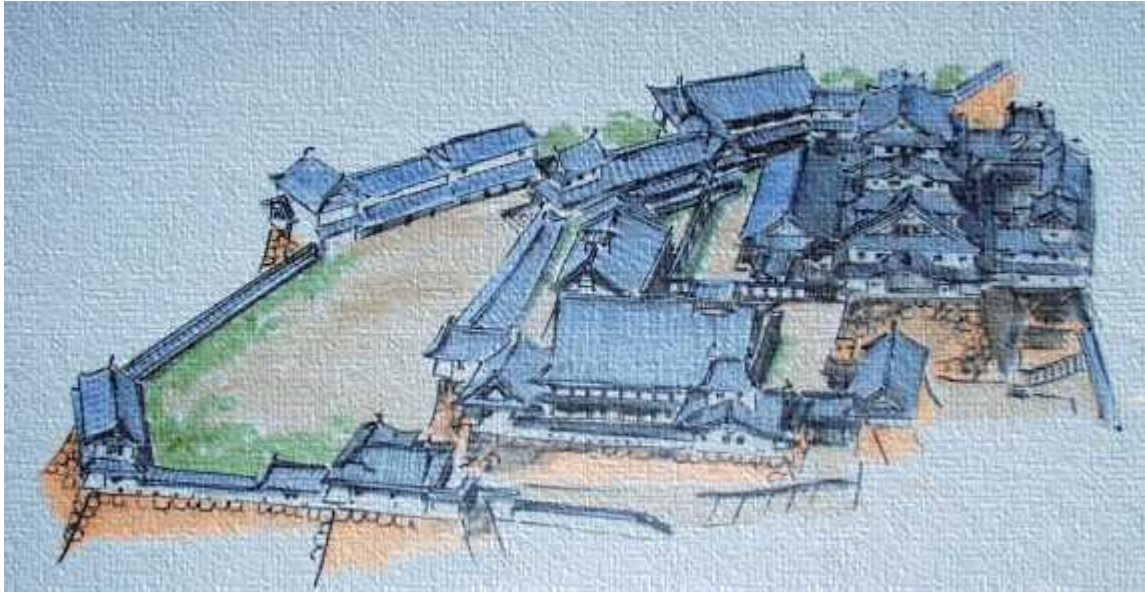
この四角の堀は、「三国濠」と呼ばれます。池田輝政が播磨、淡路、備前の 3 カ国から人夫を集めて築いたところからこの名が出たといわれます。

ここは戦術的に重要な場所で、もしも、敵兵が「菱の門」内になだれこんでも、正面「い」の門から本隊が迎え撃ち、西側の背後から、更に東の「るの門」からゲリラ隊が出撃し挟み打ちにする。逃げ場を失った敵兵はこの乾濠に落ちこむという仕組みになっています。広さは約 2500 m²、今では水がたまり防火用水にもなっております。

（写真は三国濠から天守を望む）

西の丸

ここは「西の丸」と呼ばれます。本丸の西の方角にあたることから名がついたのでしょう。左手一帯には隅櫓（すみやぐら）、渡り櫓（わたりやぐら）、長局（ながつぼね）、多聞（たもん）と呼ばれる建物が延々と 300m にわたって連なっており、俗に「百聞廊下」といわれます。連続した建物の内部は小さな部屋に仕切られ土塀と倉庫を兼ねており、城郭建築としては珍しい構えです。



（故 成井 次郎 画）

本多忠政がここ「鷲山」（さぎやま）の丘を利用して築いたもので、前の庭には、忠刻（ただとき）と千姫夫妻のための住い、伏見城から移した書院造りの立派な建物、「中書丸」（ちゅうしょまる）がありました。「百聞廊下」の部屋は 40 余りもあって、「長局」といいます。そこには多くの局（つぼね）や腰元たちが住んでいたといわれ、内部の板戸や腰板には花や鳥などが美しく描かれていました。また、窓や壁などは白粧（おしろい）や歯を染めるカネで汚れていたところもありました。

「犬走り」

戦になれば武器などの倉庫と武者（むしゃ）走りとなるこの渡櫓も、平時は女の園ですから、もちろん男子禁制です。長局（ながつぼね）の外側、石垣の上にある「犬走り」（いぬばしり）というこの道は、御用聞き男子が窓越しにご用を聞くためのものです。



化粧櫓

この櫓(やぐら)が、「千姫」の「化粧櫓」(けしょうやぐら)です。

千姫は徳川 2 代将軍秀忠(ひでただ)の長女に生まれ、7 歳で豊臣秀頼(ひでより)に嫁ぎ、大阪落城の際、坂崎出羽守(でわのかみ)に救い出されました。「助けた者には姫を嫁にやる」との祖父、家康の約束に従わず、本多忠政の長男で美男のきこえ高かった忠刻に嫁いで姫路にやってきたと伝えられます。



(故 成井 次郎 画 千姫と家康)

- 坂崎出羽守成政は、津和野 3 万石の城主ですが、約束が反古(ほご)にされるのを怒り、力づくで姫の輿を奪おうと考えましたが、諫(いさ)められ自刃させられたと伝えられます。

千姫は夫、忠刻とともに、西の丸にあった御殿「中書丸」(ちゅうしょまる)や三の丸の下屋敷「武蔵野御殿」(むさしのごてん)に住んでいました。

千姫の生涯

忠刻(ただとき)と千姫は仲むつまじく、勝姫(かつひめ)と幸千代(こうちよ)の二人の愛児が生まれましたが、幸千代はわずか 3 才でなくなり忠刻も又病死しました。悲しみの千姫は髪をおろし天樹院(てんじゅいん)と号し、間もなく江戸に帰りました。なお、勝姫は後に鳥取、岡山の城主でありました池田光政の夫人です。

忠刻の生涯

忠刻はその子幸千代とともに、書写山円教寺境内にある本多家の廟所(びょうしょ)に葬られました。なお忠刻に殉じて、岩原牛之助、宮本武蔵の養子、宮本三木之助も墓前で、切腹し、更に三木之助の家来、宮田角兵衛も死にましたので、これを哀れんで一緒に葬られています。

この化粧櫓は、千姫が忠刻に嫁いできた時に与えられた 10 万石の化粧料、今でいう持参金の一部で造ったもので、千姫が信心していた男山天満宮を拝むときの休息の場所、化粧の間であったといわれます。「中書丸」「武蔵野御殿」も姿を留めない今、これは千姫の面影をしのぶ、ただ一つの建物となりました。

男山天満宮

千姫は天満宮を信仰し、お守りとしていました比叡山延暦寺（ひえいざんえんりゃくじ）の法性坊僧正（ほっしょうぼうそうじょう）が作った天満大自在天神の木像を「男山」にまつり朝夕ここからお参りしたといわれます。同社は「男山」に東向きに建っています。

武蔵野御殿

三の丸にあった千姫夫妻の下屋敷は、戸襖（とぶすま）に金箔（きんぱく）を貼り、武蔵野をしのばせる薄（すすき）が一面に描いてありましたから「武蔵野御殿」と呼ばれました。

武者溜り（むしゃだまり）

この一角が「武者溜り」で、いざ、合戦となると、ここに武士を集め、指揮者がそれぞれの配置場所や作戦上の注意を与えたところです。



石落し



これは石落としと言います。下のほうを監視し、石垣をよじのぼる敵兵に石を投げたりするための装置で、土塀の外側や櫓（やぐら）の隅などに設けられています。

にの門 西側の鬼瓦

頭上をご覧ください。この櫓は次に通ります「にの門」なのですが、破風の棟の鬼瓦に十字架が見られます。これは姫路城に羽柴秀吉を迎え入れた先の城主、黒田官兵衛孝高ゆかりのものと考えられます。

このほかこの城には、築城の際又は修理の際に作られた諸家の紋瓦が見られます。



紋瓦

姫路城には鬼瓦、巴瓦(ともえがわら)唐草瓦などに、歴代城主の家紋がちりばめてあります。



池田氏
揚羽蝶



本多氏
三葉立葵



松平氏
三つ巴



酒井氏
剣酢漿
(けんかたばみ)



木下氏
桐



榊原氏
源氏車



羽柴氏
八弁菊



池田氏
十四弁菊

はの門 付近

皆様が歩いておられる道、城内の通路はことごとく迷路になっております。天守に近づくかと思えばたちまち反対に進み、石垣土塀の突き当たるジグザグ道です。

ここでも東に進む進路は石垣で行き止まりのように見えますが土塀をはさんでUターンして「にの門」に通じます。

これが甲州流といわれる迷路で、いうところの縄張りの妙です。こうして「菱の門」から天守閣まで直線距離で130mですが、実際の道はその2倍半もの長さになっております。

しかもその道は、急な階段と急な坂道続きで狭く高い石垣と土塀に挟まれて、まるで谷底を通るようです。敵兵が攻めこんできても、道幅がせまいため大勢が通れませんし、困難することになります。

更に塀や櫓に設けられた穴、これを狭間(さま)といいまして、城内のどこにいても、どこかの狭間からねられることになり、守りやすい仕組みになっています。



狭間（さま）

狭間は天守や櫓、塀などに開けられていて、長方形(ながしかく)のが矢狭間、円形、三角形などは、鉄砲狭間、その数は今でも約千ほどあるでしょう。この狭間によって描かれる幾何学模様は、これもこの城の特色の一つで、よく写真や絵の材料にされます。



にの門

「にの門」は天守閣の足元という大切な場所にあるので、他の門と異なった、地下1階、地上2階になっています。

地階は天井の低い地下道です。その天井、つまり1階の床板をめくって下を通る敵兵を攻撃できます。また地下道を埋めて道路をふざぐ鉄板をはりつめた扉は敵兵を通すわけがありません。守りの智慧は十分に発揮されています。

ほの門

天守閣に近づくにつれて、門はより狭く、より低く、一層堅固さを加えます。この「ほの門」も鉄板張り。低くせまいこの門ではヨロイ、カブトで長い槍などを持った敵兵はおそらく一人づつしか通れないことでしょう。

(「ほ」の門と油壁)



油壁 (あぶらかべ)

この壁は「油壁」といい、このお城の中で、ここ1ヶ所だけ残っています。

砂と粘土をモチ米のとぎ汁で、練って押し固めたものといわれ、今日のコンクリートに似て強くできており、水をはじき、弾丸にもくじけぬ不死身のカベで、400年近い年月を経ても、ご覧の通りです。

(油壁)



姥ケ石の伝説 (うばが石)

石垣の中ほどに金網で囲まれたヒキ臼(うす)のカケラが見られますが、あの石は「姥ケ石」と呼ばれ、こんな話しが伝えられています。

秀吉がここに天守を築いたとき、たくさんの石が必要なのに、思うように石が集まらず石奉行は頭を悩ました。

そのころ城下で焼きモチを売って細々と暮らしていた一人の老婆がこのことを聞いて、住民を守ってくれるお城のためにと思いたち、せめて、これでもお役に立てばと商売道具の臼を差し出したのです。

このことを知った秀吉は、大変喜び、感心してさっそくあのように積み加えました。このことを聞いた人々は、われもわれもと、競って石を差し出しましたので、工事は見る見るうちにはかどったということです。

しかしこの伝説を裏返してみると、封建時代での領主の取りたてがどんなに厳しいものであったかを物語っているともいえましょう。



お城の石

お城はどちらを向いても石で固められていますが、お城を築く材料でまず必要なのは石と木です。

このお城には、石灯籠(いしどうろう)、墓石、石棺(せっかん)などの用いられてありますが、戦国の世にいちいち石を選ぶ事などできなかったのでしょう。

記録もなく数えた人もないのでわかりませんが、この一帯「内曲輪」(うちくるわ)だけで石垣の面積は約2万8千 m²、容積は3万8千 m³以上、その重さは10万3千トン以上と考えられます。今これを船で運ぶとすると3千トン積みの船なら35隻、5トンコンテナなら21,000個が必要という勘定になります。

中には数百トンもあろうと思われる巨石もずいぶん使っており、機械力もない時代ですから、もっぱら人力に頼って苦労したと考えられます。



(石垣に使われた石棺)

腰の曲輪

ここは本丸の一角で、天守閣の北側真下で、ちょうど腰の部分にあたりますので、「腰の曲輪」(くるわ)と呼ばれています。

堀と倉庫を兼ねた長屋造りで、籠城(ろうじょう)に備えて米、塩、水を蓄えていました。

塩櫓

この建物はいくさに備えて塩をたくわえていた「塩櫓」(しおやぐら)です。1千俵をおいていたといわれ、今でも塩の湿気のあとが見られます。



水一門 から天守への通路

この通路はゆるい下り坂になっています。天守をめざして攻め登ることを考えている敵兵は、まさかと思ひ道を間違ったかと、とまどうことになるでしょう。何気ない構造にも工夫が凝らされています。

天守閣の地階

ここは大天守の地階で、外側は石垣になっておりまして、「穴蔵」とも呼ばれています。広さは約 396 m²です。

中央の倉庫の東西にある大きな柱が天守閣の心柱で、6 階まで長さは 25mありまして、東心柱は根元の直径 97cm、樫(もみ)の通し柱でしたが、今は根元から約 5.4mをとりかえてあります。西の心柱は根元が縦 85×95cm、檜(ひのき)の 2 本継ぎになっています。

台所櫓など

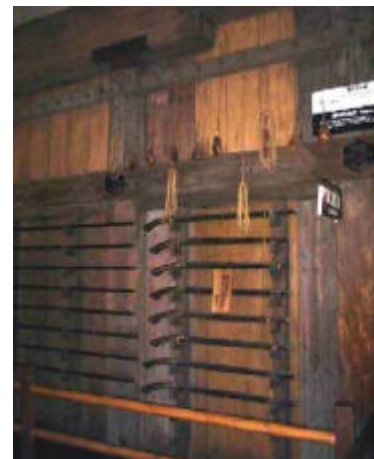
また籠城に備えて台所櫓、流し台、厠(かわや)が設けてありますが、これは他の城に例をみないものの一つです。

天守閣の第 1 階

ここは大天守の 1 階で、天守台の石垣の上に構えている部分です。俗に「千畳敷」といわれますが、330 畳敷き、554 m²の広さです。

●用具かけ

上のほうに竹釘のようなものが並んでいるのは「武具かけ」で、火縄など小道具類をかけるものです。



天守閣の第2階

広さは約 550 m²、破風の小屋裏利用の内室（うちむろ）が5階まであります。

天守閣の第3階

広さは約 440 m²

西大柱の継ぎ

西の心柱は、昭和の解体修理の際、通し柱とする予定で、新たに木曽の山中から 26.4m の檜（ひのき）を切り出しましたが、折れましたので、別に神崎郡の笠形山から切り出した材をもって、ここで相欠き継ぎをしてあります。

継ぎ手の部分には、「米 1 升 120 円」「皇太子ご成婚」のことなどが記されてあるそうです。

石打棚

南北の窓際の台は「石打棚」（いしうちだな）といいます。よじ登ってくる敵に物を投げたり、見張りをしたりする足場です。第 4 階にも設けられています。



武者隠し

これは「武者隠し」（むしゃかくし）といいます。ここに隠れていて、1人でも敵兵を殺そうという戦法で、わずかな可能性も生かそうとする戦国武士の面目がしのばれます。

ここもやはり破風の屋根裏で、少しの無駄もなく空間を上手に利用した設計といい、あらゆる戦いの場を想定して、少しでも味方に有利になるように考え抜いた先人の智慧のあとです。

天守閣の第4階

広さは約 240 m²

天守閣の第5階

この階は他の階と違って窓が少なく薄暗いのは、この5階が外側4層の屋根裏に当たっているからです。

外から見ると5層、内部は6階、地下1階、攻め手は思わぬ仕組みにとまどうことになる築城技術の妙なのです。

天守閣の最上階

ここは第6階、つまり大天守の最上階です。
大天守の高さは石垣を含めて約46m、姫山の高さも46m
ですから、海拔92mということになります。

広さは約115 m²。天正以前のものと違って長方形で、廻りは一段低く廊下のようになっており、天井を張り、長押（なげし）をとりつけ、住宅建築の様式を用いております。

天守は物見櫓の発達したものです、しかし最上階だけは、お殿様が遠くの景色をご覧になることもありまして、四方の窓にも格子をつけずに大きくとってあります。

皆さんも、どうぞ姫路城の城主になったおつもりで、城下のたたずまいを、そして播州平野を展望してください。



小天守

今、渡っているあたりが、小天守と大天守を2階で結んでいる渡櫓です。小天守は東、乾（いぬい）、西で、東南の大天守と井桁（いげた）状に築かれ、いわゆる連立式になっております。

備前丸

このあたりは本丸で、「備前丸」と呼ばれます。昔は「太閤丸」（たいこうまる）と呼んでいたようで、この天守を築いた池田輝政の住いがあったところです。

天守の偉容

小天守を従えた大天守の偉大な姿、豪華な構造の美しさをご覧ください。

姫路城の天守は、連立式、白漆喰総塗籠造（しろしっくいそうぬりこめづくり）である事が特色としてまずあげられますが、更に各層の理想的な大きさの比率による安定感、千鳥破風、唐破風の巧みな組合わせ、快くはね上がった軒隅（のきすみ）の反転（そり）、軒裏の垂木（たるき）が描く立体的な模様と、そのいず



れをとりましても整って美しく、そして、力強く私達に迫ってくるものがあります。この城こそ世界に誇る日本の代表的な城だということがわかりいただけると思います。

桜井源兵衛の伝説

ここで、天守に残る悲しい伝説をお聞きいただきましょう。

池田輝政がこの天守を築いたときの大工の棟梁(とうりょう)は桜井源兵衛という人です。源兵衛は天守ができあがり、重荷をおろしたようにほっとしましたが、しかし墨入れに誤りがあったのか、せっかく丹精をこらした天守が東南の方に傾いているように見えます。

ある日妻を伴って天守に登りますと、妻からも「天守はりっぱに出来ましたが、惜しい事に少し異のほうに傾いています。」と指摘されました。

源兵衛は「それが女の眼にも見えるのか」と悲しみ、ある日ひとり天守に登り、ノミをくわえて飛び降りて死んだと伝えられます。

姫路城の井戸

城内の内曲輪(うちくるわ)に井戸が33ヶ所ありましたが、現在残っているのは13です。

もっとも深いのは備前丸の井戸で30m、水深は6mで、帯曲輪(おびくるわ)井戸櫓(備前門の前)は25m、水深は建築後、水脈が変わったのか1mだそうです。



切腹丸

この櫓は「腹切丸」(はらりきまる)と呼ばれます。板の間が切腹の場、高い段は検死役の役席、井戸は首を洗う井戸、更に重苦しくのしかかる石の穴門、出口のない構えなど、切腹場として舞台装置が整っていることから、「腹切丸」などと呼ぶようになったのでしょう。

しかし城主はもはやこれまで...・というときは、天守で自害するのが慣わしですし、罪人は邸内の庭先か、それとも獄舎内で切腹させるのが通例で、お城の中のこのような場所を用いる筈はありません。

この櫓の正しい名前は「帯郭櫓」(おびくるわやぐら)で、検死役人の席にみえるあの台は、狭間からの射撃に便利なための石打棚にすぎません。

この一角は本丸や搦手口(からめてぐち)に近く、大切な守りの場所でこうした構造になっています。

帯の櫓

また石の穴門の上の櫓は「帯の櫓」といいまして、伏見城から移したといわれる数奇屋(すきや)造りになっていて、来客の休憩所でもあったのでしょう。外側の石垣は城内で一番高く、26mもあります。

太鼓櫓

この櫓は「太鼓櫓」(たいこやぐら)と呼ばれますが、昔の「太鼓櫓」は大手門のそばにありました。この場所は本丸への侵入を防ぐ大切な地点ですし、また城主に会う客の通路でもありますので、いつも警備の役目を果していたところです。

りの門

この門の上部には、黒ウルシ塗り、金箔でふちどった飾り板がついていますが、この「りの門」は城主や来客の通用門だったからだと考えられます。

お菊井戸

この井戸が「播州皿屋敷」の伝説で、名高い「お菊井戸」です。

その昔、永正(えいしょう)のころ、城主、小寺則職(のりとも)の家老、青山鉄山(てっさん)がお家のつとりを企てましたが、忠臣、衣笠元信(きぬがさもとのぶ)の女で、青山家の女中であつた「お菊」がこれを知り、幼い城主の難を救いました。

お菊のことを知つた青山鉄山と家来の町坪弾四郎(ちょうのつばだんしろう)は、家宝の「毒消しの皿」1枚がなくなつたぬれぎぬを、お菊に着せて責め殺しこの井戸に投込みました。

それから、毎夜、この井戸から「1枚、2枚、3枚…」と皿を数える悲しそうな声が聞こえたということです。

お菊はその後「於菊大明神」として、市内の「十二所神社」の境内にまつられましたが、それからは、皿を数える声は聞こえなくなつたということです。



ぬの門

門の上に2層の櫓がある変わった造りになっているこの門は「ぬの門」で、「備前門」に入る関所のような大切なところですから、見るからに堅固な構えになっています。

「のぞき窓」

この門の真下から上を見ると、門の天井に長四角の窓があります。これは「のぞき窓」です。鉄板張りのビョウの間から門を通る人を監視したり攻撃することができます。

こうした窓は、備前門など大切な門につけられています。

この辺りは「二の丸」になっています。

姫路城の石垣

「扇の公配」と呼ばれるゆるやかな曲線を描く石垣をご覧ください。

石垣の角度を、扇の開いた形に湾曲させてありますが、こうした反りをつけることによってこのように高き石垣を積む事が出来ますし、さらに攻め手がよじ登りにくい効果があります。

また、このお城の石垣は殆どが「野面積」(のつらづみ)で、角の部分は長辺を交互に積む「算木積」(さんぎつみ)という積み方をしています。

「野面積」は自然石を組合わせて積むものですが、その石は表面に見える大きさの2倍半以上の奥行きがありまして、その奥には2mないし5mもの厚みをもって栗石が入れられており、その上に櫓や塀を築いても容易に崩れないように堅固になっております。表の隙間には、割石や栗石を詰め込んで、石垣を登る足掛かりを防いでおります。

石垣も築城の生んだ芸術であり、この扇の曲線は見るからに快く、お城の姿を一層美しく引きたてております。



るの門 21

この門は「るの門」といいます。外からの入口は低く、出口は高く、直角に曲がった階段をのぼることになります。外から見れば「埋門」(うずみもん)、内側からは「穴門」(あなもん)という造りになっています。

これはゲリラ隊の出撃のために必要であります、また隠密の出入り口でもあったといわれる秘密の門です。



.姫路城あれこれ

「白鷺城」

大阪城を「錦城」、仙台城は「青葉城」と呼ばれるように、姫路城は「はくろじょう」とか「しらさぎじょう」などと呼ばれます。

それは「白漆喰総塗籠造」(しろしっくいそうぬりこめづくり)のこの城を、同じ山陽道にある岡山城が黒い板張りになっていて「鳥城」「からすじょう」と呼ぶのに対比してだといわれます。

また、白鷺が飛んでいるように見えるように見えることや、昔から五位鷺(ごいさぎ)が多くすんでいたことによともいわれます。

しかし姫路城のある「姫山」を「鷺山」(さぎやま)ともいったことによると考えるのが適当なのかもしれません。

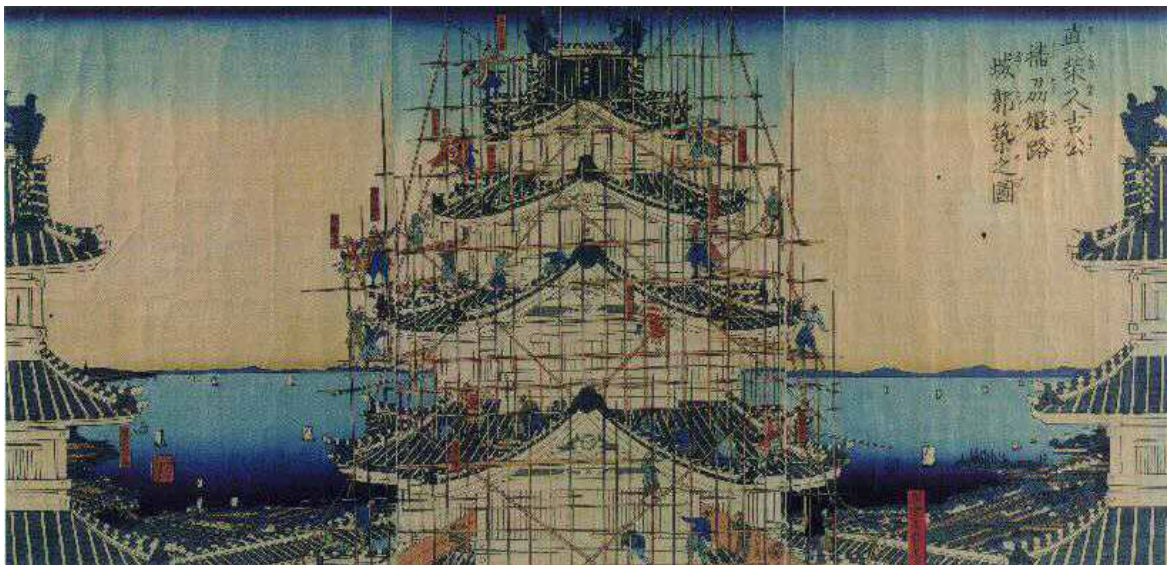
いずれにしろ、「しらさぎのしろ」と呼ばないで、漢字的に「はくろじょう」読むのが正しいそうです。

天守の畳

天守の各階には鴨居や敷居がありまして、保存工事の結果、あるいは一部分かも知れませんが戸襖(とぶすま)や畳(たたみ)が入れてあったことがわかりました。なお、全部畳を敷けば1215畳だということです。

秀吉が築いた城

羽柴秀吉が築いた3層の天守が一部でも残っているのではないかと考えられてきましたが、天守の解体工事で、輝政が今の天守を築くとき取壊したが、大きさは約7m四方、55㎡ほどの小さなものだったことがわかりました。



(徳川時代末期に製作された『羽柴秀吉公姫路城築城の図』)

不戦の城

姫路城は赤松貞範（さだのり）が南北朝時代に築き、戦国時代を経ましたから、この城でも戦いがあったのではないかと考えられます。しかし、いつも出かけて行って戦っているようで、近くで、戦われたことはあったでしょうが、この城で戦があった記録はありません。

不燃の城

棟瓦（むねがわら）に鯰鉾（しゃちほこ）を用い、門の名にも「水」を使うなど、木造建築物のお城は火をおそれました。

このお城は代々の藩主が厳しく戒めてきましたから、落雷で少しこわされたことはありますが、火災は全くありませんでした。

ところが、明治になって歩兵第 10 連隊がおかれてから、火事を起こし「備前丸」を焼いてしまいました。

しかしそれだけで、太平洋戦争でも、空襲を受け焼夷弾（しょういだん）が落ちましたが、幸い、奇跡的に助かりました。

従って、400 年近くの間にはただ一度ということになります。

姫路藩の侍数

姫路の殿様に仕えた侍は、築城した池田氏時代、300 石以上の者で、500 人余り、次の本多氏では忠刻の家来を合わせ、足軽、小者を加え約 4000 人、榊原氏時代には 3000 人、最後の酒井氏時代は 2200 人ほどでした。

築城の年数、人数

この城は、慶長 6 年（1601 年）から、池田輝政が築いたものですが、8 年間、足かけ 9 年かかっています。

従事した人数はわかりませんが、戦いに集められる兵卒の標準は 1 万石につき 200 人だったそうですから、仮にこれに従って計算してみると延べ 5000 万人以上に達することになります。どんなに少なく考えても 3000 万人はくだらないと考えられています。

昭和の築城

木造建築物の姫路城は、何度か、修理が行われてきましたが、根本的な保存工事が昭和 9 年から行われました。

まず、西の丸から行われ、太平洋戦争で中断しましたが昭和 25 年再開され、そして 31 年から天守閣の解体復元が行われました。

その方法は、全て図面や写真をとって解体し、腐った部分をとりかえて元通り造り直すのですから、天守閣だけでも 8 年間、延べ、約 25 万人が従事し、当時のお金で 5 億 5 千万円かかりました。

これは「昭和の築城」と呼ばれ、昭和 39 年 6 月 1 日完成したのでした。

あの門いつ建てられたの？えーそんなことーという建造物もある。

姫路市民は、もちろん、観光客のほとんどが潜ってその美事さに感嘆の声を上げる大手門だが、明治に入って陸軍が三の丸の一部を利用するため取り潰されていた桐二門を復元したものであるが、これが何時どのようにして造られたかは余り知られていない。

江戸時代あの地には奥から桐一門・桐二門・桜門と三つの門によって守られていたものを図面もないまま復元されたが、位置としては桐二門の場所になる。

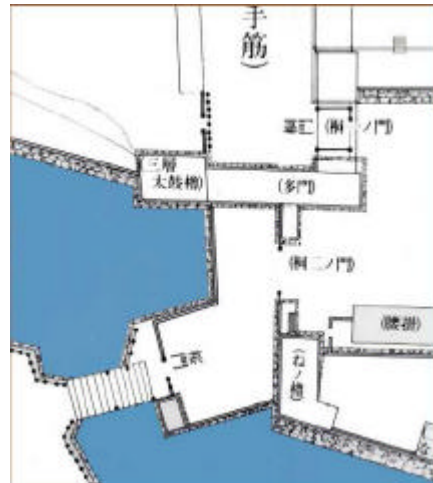
昭和に入って史蹟に国宝として二重の国家的保護を受けたことから姫路城に対する国民の関心は果然高まり、西の丸再修理が終わると新たに三の丸復興計画が建てられることになった。

昭和11年9月に着工、10月27日上棟式を行い、同13年3月に竣工したのが現在の大手門である。

構造は掖門附高麗門で、屋根は切妻・瓦葺とした。

工事費は石材代・材木代・金物代・瓦代・工事代等は合計13380円51銭であった。

この桐二門に続いて他の諸櫓、多門長屋などの工事計画がなされ、諸櫓工事代、10万20円、石垣積替、4万8023円が見積もられたが、支那事变継続のため、不急工事は繰延中止の止むなきに至って、桐二門を新築したのみで終わったことは、残念なことである。



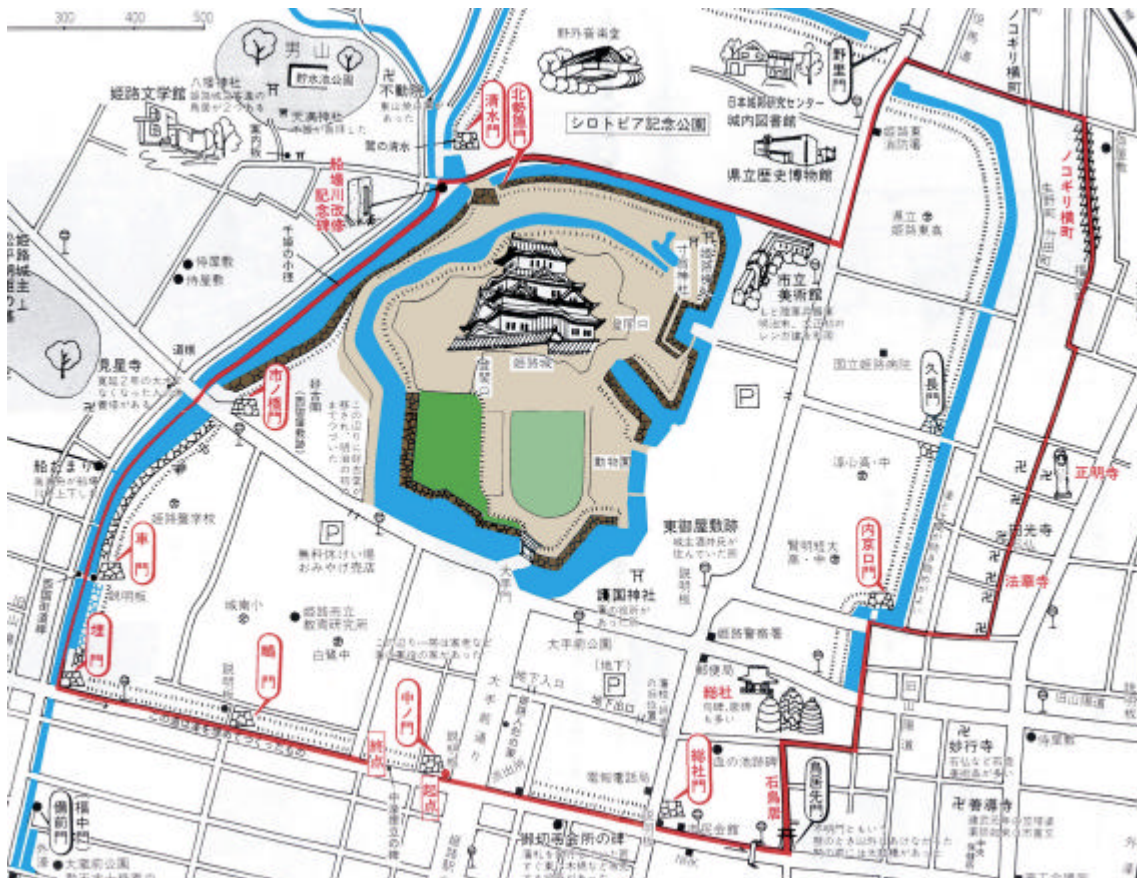
姫路城には沢山の門があったし、今も多数残っている。

何故か5と11という数字が多い。まずは内堀の中に55門あるが、その内、堀沿いにあるのが桜門・喜斎門(きさいもん)・北勢隠門(きたせがくしもん)・南勢隠門・南門の5門がある。江戸時代、儒教が盛んであったので、之を五倫にたとえている。すなわち、父子・君臣・夫婦・長幼・朋友の間の道德で、それぞれ親・義・別・序・信を言う。

中堀の中に24門あり、堀沿いには11門あって、中門・鵬門(くまたかもん)・埋門(うずめもん)・車門・市之橋門・清水門・野里門・久長門・内京口門・鳥居先門・惣社門である。十一と書いて(土)サムライ、十一の口と書いて吉の字になる。縁起をかついだのか？

外堀の中には7門あり、堀沿いには5門あって、備前口門(福中門)・飾磨門・北条門・外京口門・竹之門と言う。これらを五常といって人の行い守るべき五つの道とし、孔子・孟子などがそれぞれ強調した、仁・義・礼・智・信である。

なお、菱の門から天主まで11門がある。菱・い・ろ・は・に・ほ・水一・水二・水三・水四・水五である。水六門は西小天主とするので、数えないようである。何かこじつけのようであるが、市民の余り知らない話の一つであろう。



皆さんは、家の鬼門については、もう御存じの事と思いますが、まず家を建てる前に神主に来てもらい家を建てる土地を清めてもらいます。これは工事が無事に済むようにとの意味もありますが、その前にこの土地を神様からお借りして家を建て孫子（まごこ）の代々まで無事に過ごせるようにとお祓（はらい）をしてもらうのです。



そのお祓の中に鬼門よけの意味も含まれているのです。お祓の順序は北東の間（あいだ）から時計回りに四隅を祓います。これは、北東の間は鬼門、それも表鬼門だからです。又、裏鬼門は南西の間、そして、お家（うち）が出来てから鬼門よけとして表鬼門に柊（ひいらぎ）、裏鬼門に南天の木を植えますよね。又、私も時々見かけののですが、わざと表鬼門に当たるところに家を建てず欠けさせてあります。

姫路城の鬼門よけも同じように思います。ただお城は建物の規模が大きいのでお祓とか柊の木を植えるだけでは不充分と思われた秀吉が築城の時、今から約 400 年ほど前に表鬼門に長壁神社を祭りました。元の場所は石碑のみになっていて、竹垣が有り許可無くては行けません。現在、長壁神社は本丸の最上階にお祭りして有ります。そしてお城本丸と長壁神社石碑の延長線をたどると姫路神社が有ります。姫路神社の昔は姫路市本町、今の国道 2 号線（姫路信用金庫本町支店）元の本店の所に鎮座、昭和 2 年に今の姫山公園内に御動座なされたのもやはり鬼門除けの願いがあったものと思われます。また、堀の石垣も直角にせず、欠けるように積んで有ります。『姫路城昭和の大修理』（8 年がかり）の時、長壁神社を姫路神社でお預かりし、お祭を致しまして大修理を終えた年の 6 月 1 日に、改めて本丸最上階に御鎮座祭を致しました。そして今



も県外から鬼門除け、又、方除けと思われる姫路神社のお砂またはわき水を頂きたいとおっしゃる方がよく来られています。ちなみに、姫路城の裏鬼門は景福寺に当たるそうです。

関連年表

姫路城			日本	
西暦	和暦	事柄	西暦	事柄
1333	元弘3年	赤松則村（円心） 姫山に砦を築く	1333	鎌倉幕府滅ぶ
			1338	室町幕府を開く
			1543	鉄砲伝来
			1573	信長、室町幕府を滅ぼす
1581	天正9年	羽柴秀吉、3層の天主を築く		
			1590	豊臣秀吉全国を統一
1601	慶長6年	池田輝政、大城郭を築く	1600	関ヶ原の戦い
		本多忠政、西の丸を築く		
1617	元和3年	千姫、姫路に来る		
			1639	鎖国が完成
1808	文化5年	河合寸翁、産業を興す		
			1867	大政奉還
			1869	版籍奉還
1874	明治7年	姫路城に歩兵10連隊設置		
1879	明治12年	明治の保存工事始まる		
			1894	日清戦争、起こる
1908	明治41年	白鷺城保存期成同盟会結成	1904	日露戦争、起こる
1910	明治43年	本格的保存工事始まる		
			1914	第一次世界大戦
			1941	第二次世界大戦
1956	昭和31年	昭和の大修理始まる		
1964	昭和39年	全工事完了		
1993	平成5年	世界文化遺産に登録される		



姫路城 用語辞典

ラブル Love! Vol.6 関西電力姫路支店による

あ	赤松則村 (あかまつのりむら)
	播磨の豪族。元弘3年(1333) 赤穂郡赤松の庄苔縄の本拠から軍を進める途中、姫山の丘に砦を構え、一族の小寺頼季に守らせた。この砦が姫路城のはじまりとされている。
	赤松貞範 (あかまつさだのり)
	最初の城主。建武中興の戦功で美作守護に任ぜられ、姫山の丘に居城を築き、播磨に勢威をふるった。則村の次男。
	油壁 (あぶらかべ)
	「ほ」の門をくぐり右側。法隆寺にもある築地塀の一種。砂、粘土モチ米の汁で練り固めたもので、頑丈なことは天下一。
い	池田輝政 (いけだてるまさ)
	関ヶ原の戦功で慶長5年(1600) 播磨52万石の城主に。豊かな財力と約9年の歳月をかけ、現在の大城郭を築き、西国の將軍とうたわれた。妻の督姫(とくひめ)は徳川家康の次女。
	石落し (いしおとし)
	大天守、小天守などの主要な壁に必ず見られる末広がりの出っ張った部分。内部から真下を監視でき敵を防ぐ。
	井戸 (いど)
	大切な飲料水設備。昔は30いくつもあったというが現在は14。かわりダネはお菊井戸、腹切り丸の洗い井戸など。
	犬走り (いぬはしり)
	西の丸長局の内側の細い通路。千姫につかえていた侍女たちが召し使いたちに使い走りをさせた専用の道。
	井郭櫓 (いのくるわぐら)
	搦め手口を固めるために置かれた。流しの設備があり屋内には井戸つるべも。
う	埋門 (うずみもん)
	土塀を設けた石垣に通路部分を開けたもの。いざというときに内側を土砂で埋め、敵軍の侵入を防ぎ止める。「ほ」の門、水の門、四門
	姥ヶ石 (うばがいし)
	秀吉の築城当時、石垣の石集めの大変さを見た、城下に住む焼き餅屋の老婆が、暮らしの必需品石臼(乾小天守入り口の石垣にある)を献上したことが評判となり次々に石は集まった。
お	菊井戸 (おきくいど)
	山里丸の中央、直径3メートル、深さ20メートルの井戸。主家横領をスパイした女中のお菊をとがめ「家宝の皿が1枚足りない」と責め殺して井戸に投げ込んでしまう。悲しい声が井戸から聞こえるという「播州皿屋敷」の伝説にちなむ井戸。
	扇の勾配 (おおぎのこうばい)
	石垣の角度を扇を開いた形にソリをつけることで、より高く積み、強度を高めるとともに、攻め手が登るのを防ぐ効果をもつ石積み形式。

	大手門 （おおてもん）
	姫路城の表口。昔は桜門、桐一門、二門があり厳重な桁型門だったが、明治時代、兵営になったとき取り払われた。昭和12年に新築、この門だけは昭和生まれ。
	帯郭櫓 （おびくるわやぐら）
	天守東側の搦め手を防衛する一角、暗いムードが漂い、城外を監視する武者台が検視役人所を連想させたのか、いつのころから腹切になった。丸と呼ばれるよう。
	折廻櫓 （おれまわりやぐら）
	大天守の高石垣と設備をつなぐ櫓。北側1階が石垣2階の窓には連子式の鉄線格子がはめこまれ外から内部が見えないようになっている。
か	華灯窓 （かとうまど）
	優美さを添える寺院建築から取り入れた装飾窓。西小天守、乾小天守、菱の門などにみられる。
	河合寸翁 （かわいすんのう）
	姫路藩主、酒井家4代30年にわたって家老をつとめる。借財73万両といわれた藩財政を建て直して改革の中心人物。また、郊外に私塾仁寿山校を開校、頼山陽などを招き、幕末の姫路藩をリードする人材を育てた。
	唐破風 （からはふう）
	アーム型のなだらかな曲線状の破風。大天守では東西南北各階6カ所、千鳥格子とともに重要な外装のアクセントに。特に二層南面の唐破風は、日本古建築中最大の規模といわれている。
	搦手門 （からめてもん）
	表口の大手に対して裏口を搦手。天守閣東、姫山公園口「と」の四門。石段の坂道が曲折して「と」の二門、一門へと続く。
	厠 （かわや）
	籠城に備えて大天守地階と「は」の渡櫓のの地階に1カ所ずつ。トイレがあるのは珍しく、内部は三室の区切られ、換気の窓もある。
	瓦 （かわら）
	瓦は約75,500枚昭和の大修理の改良により500トンは軽くなったといわれる。葺き方は水蒸気が逃げる空間を考えた筋置き方法また台風に吹き飛ばされたり、隙間に入る雨を防ぐための目地漆喰が施してある。
	瓦紋 （かわらもん）
	歴代城主の紋をあしらった瓦が各所で見られる。羽柴秀吉の五三の桐、池田氏の揚羽蝶、本多氏の三ツ葉立葵、松平氏の沢潟（おもだか）、榊原氏の源氏車...珍しいものでは黒田官兵衛の十字架紋も。
く	曲輪 （くるわ）
	昔はJR姫路駅あたりに外濠があり、そこから内が外曲輪で、組屋敷や町家が並び城下町。中濠の跡がある国道2号線から内が中曲輪で、武家屋敷が主体。そして大手門をくぐって内曲輪
	黒田官兵衛 （くろだかんべえ）
	黒田氏三代目の城主。早くから信長の天下統一を予見、織田軍の武将羽柴秀吉の中国平定の際には姫路城を提供し、参謀として活躍。司馬遼太郎の「播磨灘物語」の主人公として有名。

け	化粧櫓 （けしょうやぐら）
	千姫が本多家に嫁いだときの化粧料10万石で建てた二層櫓。毎朝三の丸の武蔵野御殿から西の丸へ出て、長局から男山八幡宮を拝み男児出産を祈ったという。化粧櫓はそのときの休憩室
	懸魚 （げきょ）
	天守、小天守の千鳥、唐破風の中央に下がる飾り。三ツ花懸魚、梅鉢懸魚など。
	好古園 （こうこえん）
	西御屋敷跡を古図に基づき、日本庭園として復元。姫路城の新名所、姫路藩校の好古堂にちなんで名付けられた。
こ	高麗門 （こうらいもん）
	扉を開けたとき雨天でも濡れないように小屋根がついた構造。「い」「ろ」「へ」「と」の二、四、「り」など、饅頭金物をつけた頑丈な造りで脇戸つきと潜り戸つきがある。
	国宝と重要文化財 （こくほう）
	国宝は大天守、小天守、渡櫓など8棟、国指定の重要文化財は74棟。また姫路城跡（187ヘクタール）は特別史跡に指定されている。
	腰曲輪櫓 （こしくるわやぐら）
	天守閣の北側「イ」から「へ」まで櫓と渡櫓がゆるくカーブしながら連なっている。中央には塩櫓。籠城に備えて米や塩の食糧を貯蔵していた倉庫も。
さ	酒井氏 （さかいし）
	姫路藩最後の藩主。寛延2年（1749）前橋から入封した忠恭（ただずみ）にはじまり10代120年間、徳川の新藩として治績をあげた。江戸琳派の画家酒井抱一（ほういつ）は茶道、俳句、書画など風雅な素養のあった2代目忠似（たださね）の弟。
	榊原氏 （さかきばらし）
	第一次榊原時代（1649～67）は松平忠次、新田開発、治水につとめた名君。第二次（1704～48）は忠次の孫の政房、政祐、政岑の4代。吉原の遊女を身請けし風流を好んだが、27歳で隠居謹慎になった政岑は、ゆかた祭りの創始者として知られている。
	桜井源兵衛 （さくらいげんべえ）
	池田輝政が5層の天守閣を築いたときの大工棟梁。大天守が少し傾いている、と妻から指摘、責任を感じて天守閣から飛び降り自殺を図ったというのがこれも伝説。
	狭間 （さま）
	白壁に見られる丸や三角の”のぞき穴”内部からは外が見やすく鉄砲が打ちやすいのに対し、外からは弾丸が飛び込みにくいように工夫が。
	三国濠 （さんごくぼり）
	31メートル四方の濠。菱の門からの攻めに対し、「い」「ぬ」の両門からはさみ撃ちしここへ追うという構え。池田輝政が播磨、備前、淡路の領民に掘らせたのが名前の由来。しのびがえし石垣と建物の境目に剣ややりを並べて、これ以上進めなくするという仕組み。

け	化粧櫓 （けしょうやぐら）
	千姫が本多家に嫁いだときの化粧料10万石で建てた二層櫓。毎朝三の丸の武蔵野御殿から西の丸へ出て、長局から男山八幡宮を拝み男児出産を祈ったという。化粧櫓はそのときの休憩室
	懸魚 （げきょ）
	天守、小天守の千鳥、唐破風の中央に下がる飾り。三ツ花懸魚、梅鉢懸魚など。
	好古園 （こうこえん）
	西御屋敷跡を古図に基づき、日本庭園として復元。姫路城の新名所、姫路藩校の好古堂にちなんで名付けられた。
こ	高麗門 （こうらいもん）
	扉を開けたとき雨天でも濡れないように小屋根がついた構造。「い」「ろ」「へ」「と」の二、四、「り」など、饅頭金物をつけた頑丈な造りで脇戸つきと潜り戸つきがある。
	国宝と重要文化財 （こくほう）
	国宝は大天守、小天守、渡櫓など8棟、国指定の重要文化財は74棟。また姫路城跡（187ヘクタール）は特別史跡に指定されている。
	腰曲輪櫓 （こしくるわやぐら）
	天守閣の北側「イ」から「へ」まで櫓と渡櫓がゆるくカーブしながら連なっている。中央には塩櫓。籠城に備えて米や塩の食糧を貯蔵していた倉庫も。
さ	酒井氏 （さかいし）
	姫路藩最後の藩主。寛延2年（1749）前橋から入封した忠恭（ただずみ）にはじまり10代120年間、徳川の新藩として治績をあげた。江戸琳派の画家酒井抱一（ほういつ）は茶道、俳句、書画など風雅な素養のあった2代目忠似（たださね）の弟。
	榊原氏 （さかきばらし）
	第一次榊原時代（1649～67）は松平忠次、新田開発、治水につとめた名君。第二次（1704～48）は忠次の孫の政房、政祐、政岑の4代。吉原の遊女を身請けし風流を好んだが、27歳で隠居謹慎になった政岑は、ゆかた祭りの創始者として知られている。
	桜井源兵衛 （さくらいげんべえ）
	池田輝政が5層の天守閣を築いたときの大工棟梁。大天守が少し傾いている、と妻から指摘、責任を感じて天守閣から飛び降り自殺を図ったというがこれも伝説。
	狭間 （さま）
	白壁に見られる丸や三角の”のぞき穴”内部からは外が見やすく鉄砲が打ちやすいのに対し、外からは弾丸が飛び込みにくいように工夫が。
	三国濠 （さんごくぼり）
	31メートル四方の濠。菱の門からの攻めに対し、「い」「ぬ」の両門からはさみ撃ちしここへ追うという構え。池田輝政が播磨、備前、淡路の領民に掘らせたのが名前の由来。しのびがえし石垣と建物の境目に剣ややりを並べて、これ以上進めなくするという仕組み。

し	鯨 （しゃち）
	水を吹くという海獣がモデルの鯨は防火のまじないと装飾をかね、天守などに十一個。最上層の鯨は地元の瓦師、小林平一氏の製作で高さ二メートル近くもある。
	昭和の大修理
	昭和十年から本格的な工事を開始。天守群など中核部の解体修理・復元は三十一年から八年がかり、三十九年六月に完成した。再用できる木材、石材などはできる限り使われたが、屋根瓦はほとんど取りかえられた。これ以前のも寛永三年（一六二六）以来、約六十回もの補修が行われている。
	白漆喰総塗籠 （しろしっくいそうぬりごめ）
	木地に縄巻、下げ縄をして荒打ち、むら直し、砂ずり、中塗り、そして漆喰を塗り重ねる左官工法。壁、土塀、軒裏などすべてこの技法で、防火、銃弾に対する構えが厳重に。上塗りのしろ漆喰は、のりと川砂を混合して防水の工夫が施してある。
	心柱 （しんばしら）
	大天守中央部を東西二本の心柱が貫通。東心柱は穴栗部産の杉、西心柱は桧だが、昭和大修理の運搬中の折れてしまったため、根元の方は木 国 有林、上方は神崎郡笠形神社の神木を二本継いである。
す	筋交柱 （すじかいばしら）
	大天守の重量約5000トンを中心柱と189本の柱で支えているが、負担が大きくなる下層の四隅の柱には筋交柱を入れ重圧を分散。
	隅櫓 （すみやぐら）
	曲輪の隅に設けられた櫓、監視を防御を兼ね、ほとんどが二層櫓で武者窓、狭間、石落としが備わっている。
せ	世界文化遺産 （せかいぶんかいさん）
	ユネスコの世界文化遺産の平成5年12月日本で初めて登録。人類が永久に保存していかなければならない自然や文化財を、地球規模で守っていこうというもので、加盟国は132、文化遺産はベルサイユ宮殿、万里の長城、ピラミッドなど270件。芸術、文化、建築学各々の厳しい選定条件をクリア、特に周辺の文化施設が整備されまちと素晴らしい調和を保っていることが大きな要素となった。
	勢隠し （せかくし）
	秘密兵器の隠し場所。姫山公園の北勢隠門と南勢隠門が残っている。
	千姫 （せんひめ）
	徳川家康の孫娘。大恋愛の末、本多忠刻の再嫁。長男幸千代、夫の死...十年足らずで姫路城をあとに江戸へ。
た	大天守 （だいてんしゅ）
	外観は5層、内部は地下1階、地上6階、入母屋と破風をバランスよく配置した華麗な姿を誇る。建物の高さは31.5、石垣の高さは14.8、姫山の標高45.6メートル、合計すると海拔92メートルに。
	台所櫓
	大天守中庭にある櫓。いざ籠城、に備えて一階が調理場、二階が食堂。大天守地階、「口」の渡り櫓、中庭への三つの出入り口がある。

ち	千鳥破風 （ちどりはふう）
	屋根の三角破風。大千鳥は二層東西の屋根から4階の唐破風に迫る大きなもので片屋根の流れは十メートル。さらに南北両面の三層左右と四層中央に三つの千鳥が配置され、大天守上層部に荘厳さをプラスしている。
て	天守物語
	姫路城を舞台に、妖艶な世界が繰り広げられる泉鏡花の戯曲。最近では、玉三郎が演じて話題になった。
と	豊臣秀吉 （とよとみひでよし）
	天正五年（1577）中国平定で播磨に出兵、黒田官兵衛から譲り受けた姫路城に、三層の天守を築いた。また城下町の繁栄、商業の振興にも心を配り、城下町としての体裁をほぼ整えた。
な	中村重遠大佐 （なかむらしげとうたいさ）
	全国の城が取り壊しや風雨にさらされていたとき、当時の陸軍省中村大佐が文化財的価値を惜しみ、陸軍大臣山県有朋にかけあい、国費による修理保存へと導いた。菱の門に顕彰碑がある。高知県、宿毛市の出身。
	長局 （ながつぼね）
	西の丸の「を」の櫓から化粧櫓までの長い廊下伝いに、二十ほどの部屋が仕切られている。無骨で防備万全のつくりだが、千姫の侍女たちが住んでいた女の館。
に	23円50銭 （にじゅうさんえん）
	廃城令で姫路城は明治八年ごろ競売にかけられ、米田町の神戸清一郎という人が23円50銭で落札。しかし解体費用があまりにも莫大だったため断念した。
の	野面積 （のづらづみ）
	野面は加工していない石の肌のこと。姫路城内ほとんどの石垣が野面を組んだ野面積、重量のかかる角が算木数。一見粗雑だが内部までしっかり組まれている。
は	白鷺城 （はくろじょう）
	白漆喰総塗籠造の輝くような白い壁と、大天守、3つの小天守の並んだ姿を白鷺の飛び立つ様子にたとえたといわれる。正式には「はくろじょう」と呼ぶ。
ひ	菱の門 （ひしのもん）
	三の丸から二の丸へ至る大手口を固める姫路城最大の櫓門。2本の柱は根巻、饅頭金物で武装、扉の八双金具、化粧鉾はど桃山建築の華麗な風格が伝わる。
	姫山原始林 （ひめやまげんしりん）
	城の北西面に広がる森。約150種類もの植物が生い茂る。森の構成半分以上を占めるタラヨウは葉が厚く燃えにくい。防火の為に植えたい。
	備前丸 （びぜんまる）
	天守閣南の広場、池田輝正の別館のあったところ。次男の忠継は備前28万石を領したがまだ幼い頃は母督姫とここに住んでいた。明治15年焼失。
ふ	不死鳥 （ふしちょう）
	防御に万全を尽くした造りでありながら、城の戦闘は一度も行われなかった。さらに第2次世界大戦で市街地の大半が焼けたときも、奇跡的に難を免れた幸運な城。不戦、不燃の城は平和のシンボル...

み	宮本武蔵 （みやもとむさし）
	天守閣に夜な夜な出るという妖怪を、のちの二刀流の達人武蔵が最上階の形部大神の前で退治したという伝説。
む	武蔵野御殿 （むさしのごてん）
	三の丸広場西端にあった本多忠時刻と千姫夫妻が住んでいた屋敷伏見城の一部を移築した豪邸で、壁に色鮮やかなススキが描かれていたという。
	武者隠し （むしゃかくし）
	天守閣3階の4隅、千鳥破風の屋根裏を利用した部屋。ここに城兵をしのばせ警備にあたらせていた。
め	迷路 （めいろ）
	城内も通路は右に左に行き止まりだったり、Uターンさせられたり。天守閣は目の前だがなかなか近づけない複雑な設計。城郭建築史上最盛期ならではの縄張り。
や	山里丸 （やまざとまる）
	他城でもみられる庭園、山水、茶室を設けた一画。お菊井戸のあるこの広場がかつては姫路城の庭園だった。
ゆ	遊女 高尾 （ゆうじょ たかお）
	榊原三代目政岑に身請けされた吉原三浦屋の遊女。西御屋敷で寵愛を受けるが、隠居謹慎になった政岑とともに越後高田へ。しかし政岑は29歳で他界、責任を感じた高尾は尼となり弔ったという。
ら	螺旋式縄張り （らせんしきなわばり）
	内濠、中濠、外濠の何重もの螺旋状の濠によって囲まれた複雑巧妙な設計。濠の総延長は11.5km、外濠で囲まれた城下町の範囲は約57万坪という広大なもの。連立式天守閣は大天守をかばうように東、西、乾（北西）の3つの小天守が渡櫓で結ばれ安定した横線の広がりを見せている。この連立式天守が完全な形で残っているのは姫路城だけである。



参考資料

姫路城ガイド教本	姫路観光協会	昭和 57 年 9 月
姫路 - お城物語	姫路市教育委員会	平成 7 年 3 月
姫路市史 第 14 巻『別編・姫路城』	姫路市	昭和 63 年 7 月
ラ・ル・ブ LpvelE	関西電力姫路支店	昭和 69 年 4 月
姫路鷺城ライオンズクラブ 会報		

資料提供

姫路鷺城ライオンズクラブ 川石雅也 (故)成井 次郎 読売新聞社



(化粧櫓から見る三国堀と菱の門)

あとがき

世界文化遺産として、日本で第 1 号に登録された国宝姫路城のガイドブックをこの度姫路鷺城ライオンズクラブから改訂版として発行されました。

世界的に認知された貴重な建造物なのに、案外地元の人達は関心が薄い。身近すぎて、ここにあることが当然と思っているのであろう。登城者のほとんどが姫路市以外の方であり、最近では外国からの見学者数も年々増加しているのに・・・。

ユネスコのリストに加えられて丸 7 年、築城 4 0 0 年の今、姫路市民に認識を新たにしてもらって、市民の誰もがそれなりのガイドが出来るようになれば、このガイドブック発刊にとって一番喜ばしいことである。

PR・情報・インターネット委員会

姫路鷺城ライオンズクラブ

〒670-0932

姫路市下寺町 43 姫路商工会議所 新館 3F

TEL 0792-81-2800 FAX 0792-88-8341

<http://www2.memenet.or.jp/~rojyo/>

rojyo@memenet.or.jp

姫路城ガイドコース略図

